

近畿地方ダム等管理フォローアップ委員会 第3回大滝ダムモニタリング部会 議事概要

開催日時：平成 28 年 2 月 1 日(月) 10:00～12:00

開催場所：大阪マーチャンダイズ・マートビル 2 F 205 号室（大阪市中心区大手前 1-7-31）

出席委員：5名

1. 議事

- (1) 事務局より、資料 - 1 により「ご指摘・ご助言への対応状況」について説明がなされ、内容について了承された。
- (2) 事務局より、資料 - 2 により「事業の概要」、「環境調査の概要」、「モニタリング調査結果のまとめ」、「フォローアップ調査計画(案)」について説明がなされた後、委員による審議がなされ、以下のようにとりまとめられた。

1) モニタリング調査結果のまとめ

- ・平成 15 年に完成、平成 25 年から本格管理を開始した大滝ダムでは、湛水域の水質、上流河川、湛水域及び周辺の生物相に変化はみられるものの、現時点では限定的である。
- ・下流河川では、選択取水等を行っていることもあり、管理運用による水質面、流況面による生物への顕著な影響はみられていない。
- ・一方、大滝ダム直上流に既存の大迫ダムも含め、大滝ダムの完成によって土砂供給が減少したことで、下流河川の底生動物や魚類の生息状況が変化したとみられる。
- ・今後はフォローアップ調査へ移行するが、まだ不明な点も多いため、ダム管理に必要な調査はしばらく継続する。
- ・また、すでにみられる変化に対してはその影響を緩和できるよう対策に努めていく。

I. 湛水域及び周辺

1. 湛水域では、止水域の形成により滞留時間が延び、植物プランクトンが増殖した。大迫ダムの工事によるとみられる濁りやリンの流入がみられたが、顕著な赤潮やアオコは発生していない。今後も赤潮・アオコについて監視を継続し、状況に応じて対策を検討する。
2. 試験湛水以降、第1期制限水位（302m）以下の湖岸では裸地化が進行した。湖岸の水位変動域のうち302mより高い区域では裸地化は起きていないが、先駆性の草本のみが生育し、植生が定着しにくい状況であった。今後も緑化の実験・検討を継続する。
3. 湛水域周辺では、陸域上位捕食者である希少猛禽類の繁殖に現時点で顕著な変化はみられていない。一方、水域上位捕食者である[]の分布が縮小した。湛水のほか工事による一時的な影響があるため、フォローアップ調査で確認を行っていく。

II. 上流河川

1. 大滝ダム堤体によって上下流の移動が制限され、 等が上流河川で未確認であるが、1回の調査では生息を把握しきれていない可能性がある。また、上流の流水域が縮小し、カワムツ、シマドジョウ等の確認範囲が減少した。これら魚

種の生息が今後も維持されるかは現時点では評価できず、フォローアップ調査で確認を行っていく。

III. 下流河川

1. 下流河川では、大迫ダムでの土砂遮断があったところに加え、大滝ダムの完成によって下流河川への土砂供給がさらに減少し、河床の砂礫が減少したことによりヒゲナガカワトビケラ属の営巣に適した礫間隙が減り、岩表面にも営巣できるシマトビケラ類が増加した。また、土砂供給の減少によって魚類相では砂礫の瀬が減少したことで■が減少、淵が増加したことでカワムツの割合が増加した。底生動物や魚類に対する運用開始に伴う流況変化や水質変化の影響はまだ明らかでない。今後、必要な調査を継続するとともに、土砂還元による対策を検討する。
2. 選択取水設備の運用により放流水の水温や濁りを調節し、現時点でアユへの肥満度に変化はみられず、冷水病発症個体も近年はほとんどみられない。しかし、今後状況が変化する可能性もあることから、フォローアップ調査で確認を行っていく。
3. 洪水調節を行い、下流河川の出水時のピーク流量は低減できた。この結果、下流河川の河原植生が増加することが想定されたが、平成 23 年以降に出水が繰り返しているため、管理運用による流況変化の河原植生への影響はまだ明らかでない。今後フォローアップ調査で確認を行っていく。

IV. 全域

1. 運用開始前の調査で、事業影響を受ける場所のみで確認された重要種 57 種のうち、35 種が運用開始後に確認できていないが、そもそも生息数が少ない等、生息をまだ把握しきれていない可能性がある。今後フォローアップ調査で確認を行っていく。
2. 運用開始前の調査で確認されている外来種 32 種のうち、運用開始後に 23 種を確認した。また、新たに 3 種（ブラントラウト、オオカワヂシャ、ナルトサワギク）を確認したが、侵入由来は不明である。今後も特定外来生物の防除に努める。

2) フォローアップ調査計画（案）

- ・ 事務局案で了承された。

(3) その他

- ・ 特になし。

以上